

ベルリオーズ／幻想交響曲 Op.14

前半のコダーイとプーランクは 1930 年代前半のほぼ同じ時期の作品だったが、後半は約 1 世紀さかのぼって、1830 年の 2 月から 4 月にかけて作曲されたベルリオーズの《幻想交響曲》が演奏される。それまでフランスでは人気のなかった交響曲というジャンルを取り上げながら、自伝的な物語に沿って巧みな手法で音楽を展開し、大成功を収めた作品である。

この曲には「ある芸術家の生涯におけるエピソード」という副題が付けられている。当時、髪を振り乱したベートーヴェンの肖像画が好まれたことからもわかるとおり、芸術家とは常人とかけ離れた才能にふさわしく、際立って特異な人物というイメージだった。《幻想交響曲》では、若く想像力にあふれる芸術家が失恋によって服毒自殺を図るのだが、致死量に達しなかったため、恋人を殺して魔女の饗宴におもむくという奇怪な幻想をみるストーリーが描かれている。その主人公はまさに当時の人々が抱いていた典型的な芸術家像である。そして、この若い芸術家をベルリオーズ自身と重ね合わせることによって、作品は一層、注目を集めた。

ベルリオーズの失恋の相手はイギリスのシェイクスピア劇団の主演女優としてパリで公演していたハリエット・スミスソン。すでに 3 年前に終わった片思いを物語のモチーフとしたのだが、その後、ピアニストのカミーユ・モークと恋仲だったベルリオーズは何としても有望な作曲家として注目を集め、モークの家族に認められる必要があった。そこで、初演に先立ってこの作品の標題を発表し、当日の会場でも標題を印刷した紙を配って、作曲家と女優の実話に基づく作品というスキャンダラスな噂を流した。しかも、ちょうど初演のときに、眼と鼻の先のオペラ座にスミスソンが出演しているという、絶好の機会を周到に利用した。思惑通り、話題となり、初演にはパリの音楽家や批評家がずらりと顔を揃えたのである。

第 1 楽章「夢、情熱」は恋人に出会う前の倦怠感をあらわした序奏ではじまる。展開部と再現部を 2 つ含む拡大されたソナタ形式で、強烈な愛の体験から宗教的な慰めの境地にいたるまでが描かれる。3 部形式による第 2 楽章「舞踏会」はドイツ風のワルツ。人の波の間に恋人の姿がみえる。2 台のハーブが晴れやかな楽想を奏でていく。第 3 楽章「野の情景」はけだるい夏の夕暮れ。羊飼いたちが呼び交わす笛を聴きながら、若い芸術家の脳裏には恋人の面影がよぎる。イングリッシュ・ホルンと 2 対のティンパニが斬新。第 4 楽章「断頭台への行進」は恋人を殺した罪で断頭台へと向かうシーン。序奏で始まり、荒々しく爆発的な楽想が響く。終わりにはギロチンの一撃で首がころがり、見物の群衆が声をあげるというおどろおどろしい様子が描写される。さらにグロテスクなのが第 5 楽章「ワルプルギスの夜の夢」。魔女たちの踊りの中で、恋人のモチーフがクラリネットで醜悪に奏でられ、吊いの鐘が鳴り、「怒りの日」のパロディでは弦を弓で打つ奏法を用いて、騒々しい様子を強調する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。